

明治37年から38年の日本の存亡がかかっていた日露戦争は、日本海海戦で東郷平八郎提督※の連合艦隊が、ほぼ無傷でバルチック艦隊を壊滅させるという世界の海戦史に残る勝利で決しました。しかし、日本は戦争継続の資金も、弾薬も枯渇していた状態で、薄氷の勝利だったといえます。

※アメリカ・ジョーンズ提督、イギリス・ネルソン提督とともに世界三大提督と言われます。

日清日露戦争の勝利によって、欧米列強国の植民地政策の防衛ラインと考えていた朝鮮半島の清、ロシアの影響を排除することに成功しました。

また、戦いの評価や、世界的に知られることになった武士道精神は、日本の国際的な認識を高めることになり、明治維新から約45年の比較的短期間で全ての列強国との不平等条約が解消され、アジアで唯一、国際的に一人前の国として認められることになります。

しかし、日清戦争の戦死者1万4千人に対し、日露戦争では6倍におよぶ8万4千人の犠牲によってロシアから引き継いだ満州権益は、大きな犠牲を払ったがゆえに日本国民の執着を生み、その後の大陸での泥沼の関わりを導きます。また、満州権益に介入できなかったアメリカは、日本を仮想敵国と認識するようになり、日本人排斥運動がはじまります。

このように、日清日露戦争は日本の歴史の大きな転換点となりましたが、欧米列強国に弱小国が初めて勝った日露戦争は、世界史的にも大きな転換点となり虐げられている民族に希望を与えました。以下は世界の反応の抜粋です。

中国：孫文

「これはアジア人の欧州人に対する最初の勝利であった。全アジアに影響を及ぼし、全アジア民族は歓喜し、大きな希望を抱くにいたった」

インド革命家：ビハリ・ボース

「東洋は、この戦勝によって目覚めた。トルコをはじめ、フィリピンまでも東アジア民族が立ち上がろうと希望をもったことは、歴史の事実だ」

ビルマ：バーモウ首相

「アジアの目覚めは日本のロシアに対する勝利に始まり、全ての虐げられた民衆に新しい夢を与える歴史的な夜明けだった」

フィンランド大統領：カール・マンネルハイム

「小国フィンランドといえども、国民が一致団結すれば大国ロシアにも勝てるとの教訓を得た」

歴史学者：アーノルド・トインビー

「日本人が歴史に残した功績の意義は、アジアとアフリカを支配してきた西洋人が、不敗の神ではないことを明らかにしたことである」



東郷平八郎大将



バルチック艦隊